

千葉県の産業遺産とその活用を考える

－3か年にわたる講座の実施を通じて－

*小笠原永隆

Nagataka OGASAWARA

要旨： 千葉県立現代産業科学館では、講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」を3か年にわたり実施した。25年度では「本県における観光産業の始まりー成田詣ー」及び「本県における酪農産業のはじまりー嶺岡牧ー」の2つをテーマとして、座学及び現地巡検を実施した。これまで、①千葉県産業遺産のストーリーモデル構築、②産業遺産活用実践体制の確立（人材養成）を目標として3か年にわたって実施してきたが、①についてはある程度達成できたが、②については程遠いと言わざるを得ない。このため、今後は出来るだけワークショップ形式など、受講生が作業する機会だけでなく、ボランティアガイドなど地域における用の担い手と交流する機会も増やしていくことが求められる。同時に館としても基礎的情報の収集と学術的検討をすすめ、基礎的な体力を向上することが必要となる。

キーワード： 産業遺産 活用 地域住民 サポーターズ 人材養成

1 はじめに

千葉県の産業遺産の活用に関しては、小笠原（2011・2012・2013）において、本館の資料蓄積に加え、地域資源としての活用に向けたストーリー構築やマネジメントを行う機能を持つべきであることが、今後の課題であることを指摘した。

このような課題を解決するために、本館では平成23年度から3か年にわたり講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」を実施した(図1・2)。本稿では、この実施結果を通じて、県内の産業遺産活用に向けた課題解決のための方策について考察を行っていくこととする。

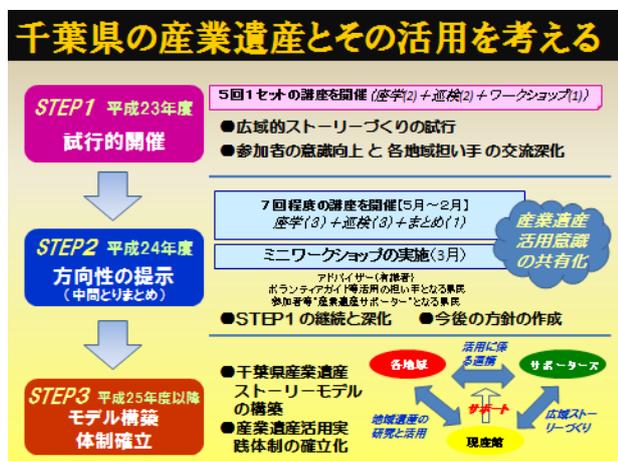


図1 講座イメージ

2 平成25年度講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」について

(1) 概要

今年度は講座3年目ということもあり、これ

図2 平成25年度講座募集チラシ

まで実施してきたことの総まとめ的な意味合いを持つこととなった。今年度は産業遺産の活用モデルならびに活用体制の確立にむけて本格的に行動を開始する年とすることを目的としていたが、その目的が達成されたとは言い難い。詳細は後述するが、その意味で課題も多く発見できたことは、大きな成果だったかもしれない。

今年度は「本県における観光産業の始まりー成田詣ー」及び「本県における酪農産業のはじまりー嶺岡牧ー」の2つをテーマとして実施した。どちらも座学を1回行った後、現地巡検を2日間にわたって実施した。これに加えて、初回にガイダンス、最後の2回にまとめを行うために受講生によるワークショップ、一般に公開するミニシンポジウムをそれぞれ実施した。

(2) テーマ1「本県における観光産業の始まりー成田詣ー」について

①「成田詣」について

「成田詣」は、江戸時代中期(元禄期)から盛んになり、現在では年間1千万以上の参拝客が訪れる全国有数の霊場として賑わいを見せている。

元禄13(1700)年に住職となった「中興照範」、翌年から老中及び佐倉藩主となった「稲葉正通(正往)」の両者は、成田山新勝寺の興隆に尽力する。元禄16(1703)年、深川での江戸出開帳を成功させ、成田山の知名度を大きく高めた。さらに宝永4(1707)年には、江戸弥勒寺の末寺から京都大覚寺の直末になり、寺格を飛躍的に向上させた。その後もたびたび出開帳を行い、そのたびに知名度が上がり、成田山へ参詣する人々は増加することとなった。

成田山への参詣が盛んになると、周辺農家が食品を売るようになるとともに、家を改造して煮売屋(食堂)や旅籠屋(旅館)を営むようになり、門前町の形成が始まり、他地域から商売目的で移住する人も多くなり、門前町は一層発展することとなる。さらに、船橋宿の遊郭など、江戸から成田へ向かう道筋(本来は佐倉道であるが、成田山への参詣者が増えるとともに「成田道」と呼称されるようになった。)の充実・整備が進み、2~3泊程度で往復できる成田詣は、手軽な「旅」をする場所として庶民に間に人気を広がっていったよ

うであり、それに伴って新たな「産業」が形成されていく様相が看取されることから、千葉県における「観光産業」の始まりとみてよいと思われる。門前町は現在も年間1千万人を越える参詣客を受け入れながら発展を続けている。街道筋の宿場町は、「成田詣」の役割は終えたが、船橋のようにそれを母体として発展した町も見る事ができる。

②講座の内容

このように「成田詣」は千葉県の「観光(関連)産業」を引き起こし、現在の「市街」や「地域」を形成したことは明らかであり、本県の地域や産業を考える上で外すことのできない事項であることから講座のテーマとして取り上げることとした。

講座は、「座学1日+巡検2日」という構成とし、座学で知識をつけてから現地を見るという過去の講座構成を踏襲した。内容については下記のとおりである。

座学① (7月7日(日)13:30~16:00)

- ・「成田街道について」山本光正氏(元国立歴史民俗博物館教授)
- ・「千葉県における観光産業の発達」大下茂氏(帝京大学経済学部観光経営学科長)

座学②・巡検① (9月7日(土)10:30~16:30)

- ・「成田山と成田詣」小倉博氏(成田山霊光館総務課長)
- ・「成田山境内を歩く」※「成田ボランティアガイドの会」のご案内による



図3 成田山境内見学の様子

巡検②（9月8日（日）9:30～16:30）

・「成田山への参詣道(佐倉及び両国周辺)を歩く」



図4 佐倉付近見学の様子



図5 両国付近見学の様子

（3）テーマ2「本県における酪農産業の始まりー嶺岡牧ー」について

①嶺岡牧について

嶺岡牧は、現在の南房総市および鴨川市にあり、江戸時代に幕府直轄牧4か所のうちの一つとして軍馬生産を盛んに行っていた。平安時代中期（10世紀）の「延喜式」に記された古代牧に起源を持ち、中世に里見氏の牧、近世に徳川幕府の直轄牧、そして近代は畜産会社の牧として、衰退（休止）期間をはさんでいるものの、1911年まで千年以上も連綿と「牧」として利用され続けてきたことになる。

そして、江戸幕府8代将軍吉宗の時期に、衰退していた牧を再興しただけでなく、3頭の白牛を海外から輸入し、嶺岡牧で飼育及び搾乳を行い、

「酪」の製造を計画的に行ったことから、「日本酪農（産業）発祥の地」と位置付けられている。

このように歴史的にも重要度が極めて高い遺跡であることは明らかであり、比較的有名であったのかかわらず、その実態はほとんど不明であった。木がおおい繁った深い山中にあり、現地に入った調査が行われることはほとんどないまま、牧に関連する遺構（野馬土手など）は、その大部分が残存していないと考えられていた（青木 2005等）。しかし、鴨川市が2011年度に、千葉県酪農のさとが2012年度及び2013年度に、それぞれ本格的な分布調査をはじめとする総合的な調査を実施した。その結果は、日暮（2012）及び日暮・千葉（2013）によりまとめられ、牧の外周をめぐる大土手だけで総延長40kmを越える野馬土手が残存していることが明らかにされた。

さらに、野馬土手の構築には、千葉県の牧としては唯一、石が用いられている。牧にある山中は嶺岡石と呼ばれる蛇紋岩の露頭があり、石を切り出した丁場跡も確認されている。さらには、馬の水飲み場、仮囲、木戸、陣屋、古道、馬場等の跡も確認され、牧を構成する遺構が良好な状態にあることも確認された。同時に現在も残る牧士の家に残る古文書調査、馬頭観音の分布調査なども併せて実施され、牧の経営（維持管理）から信仰に至るまで、牧に係る地域の生活実像も見えるようになってきている。

②講座の内容

嶺岡牧の遺構や古文書等は、近世に関することが中心であるが、先述したように牧自体は1911年まで連綿と続いており、「酪農技術」も受け継がれながら、改良・発展を繰り返していたものと考えられる。つまり、近代以降の嶺岡に乳加工業が発達した背景に、それまでの歴史（技術の積み重ね）があることは言うまでもなく、それを示す痕跡（野馬土手、水飲み場や陣屋跡など牧に関連するすべての構築物の痕跡）は当然「産業遺産」として扱うべきものである。そもそも、「日本酪農（産業）発祥の地」と位置付けられており、嶺岡牧全体が「酪農産業」技術の始まりと展開を探ることができる重要なフィールドであり、最重要遺産であると言っても過言ではないと思われることから

講座のテーマとして取り上げることとした。

講座は、成田詣と同じく「座学 1 日 + 巡検 2 日」という構成とした。内容については下記のとおりである。

座学 (11 月 2 日(土) 13:00~16:00)

- ・「千葉県における酪農産業の発祥と発展」林克郎氏 (千葉県酪農農業協同組合連合会)
- ・「嶺岡牧 (鴨川市・南房総市) の実態と今後の活用について」日暮晃一氏 (NPO 法人エコロジーアーキスケープ)

巡検① (12 月 14 日(土) 9:00~17:00)

- ・「嶺岡牧 (鴨川市・南房総市) を歩く」
- ※千葉県酪農のさと・千葉県嶺岡乳牛研究所の施設見学等も含む



図 6 嶺岡乳牛研究所見学の様子



図 7 嶺岡牧見学の様子

巡検② (1 月 12 日(日) 9:00~16:30)

- ・「現代の「酪農産業」と「牧」を見る」
- ※鎌ヶ谷市郷土資料館 (小金牧捕込跡)・コーシン乳業千葉工業の見学を含む



図 8 小金牧捕込跡見学の様子



図 9 コーシン乳業工場見学の様子

(4) ワークショップ及びミニシンポジウムについて

ワークショップで受講生が年間の講座を振り返るとともに、3年間実施してきた総まとめとして公開のミニシンポジウムを下記のとおり実施した。

・**ワークショップ** (2 月 22 日(日) 13:30~16:00)

出席した受講生を「成田詣」と「嶺岡牧」の 2 班に分け、それぞれ①講座内容の改善点ならびに要望、②遺産等の活用方策について、KJ法に基づく付箋を利用した話し合いを行った。その結果概要を図 10~13 に示す。

「成田詣」班 改善点及び要望 (図 10) は、成田山及び成田街道そのものについて、もっと知識を深めたいとする要望だけでなく、門前町で長く続く店を調べたい、当時旅をした人々の声を文書から探りたいとする、より具体的かつ積極的な意見もみられた。さらに、ボランティアガイドをさ

れている方の生の声を聞きたいという「活用の最前線」に関する要望もあった。活用方策に関して(図11)は、「現代版成田詣」の実施、成田全体の魅力アップ、視点を変えた「物語」の構築などかなり具体的な提案がなされた。さらに、すたれていく成田街道に関する遺産を見て、多くの世代に伝えていく必要を訴える意見もみられた。

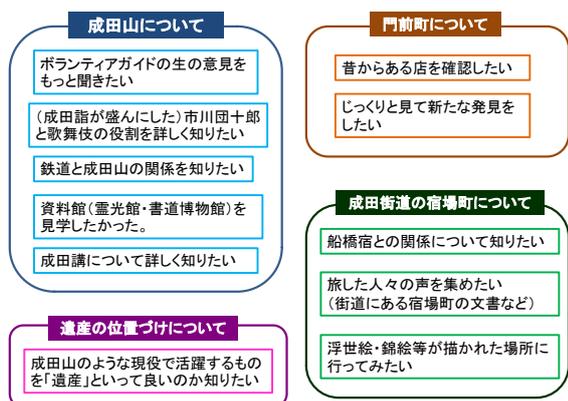


図10 「成田詣」班 (改善点・要望)

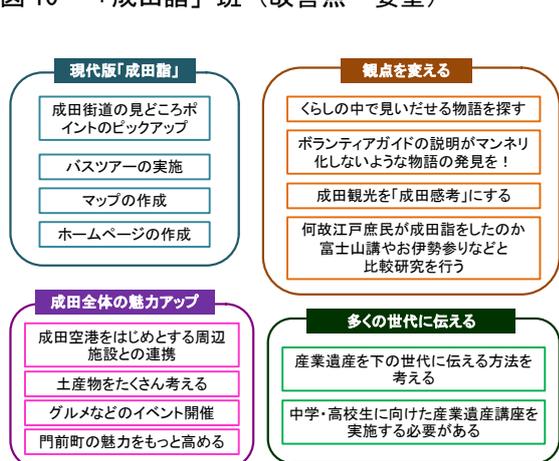


図11 「成田詣」班 (活用方策)

「嶺岡牧」班 改善点及び要望(図12)についてみると、多様な意見が出ているが、「嶺岡牧」そのものに関する内容のボリュームが大きく、座学も巡検も今回開催した回数では物足りない、という点で共通性が見られた。座学の講師および巡検でも現地案内をして下さった日暮晃一氏の嶺岡牧にかける熱意の賜物であることは間違いないが、それに触発された受講生の積極的な意見であるとして差支えないと思われる。活用方策に関して(図13)は、未整備で知名度も低い嶺岡牧について、昔の姿(草原と低木)に戻して、実際に牛馬を放牧し、見学コースを整備するとともに、他の地域

資源と併せたPRを行政と連携しながら進めていくということに集約される。さらに、現地巡検時に郷土料理(チッコカタメターノ=乳つ子固めたもの=牛乳豆腐のようなもの)が入った弁当を昼食に供したことから、食に関する積極的な意見もみられた。

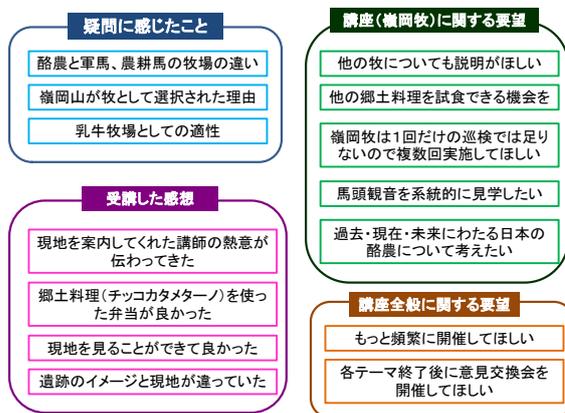


図12 「嶺岡牧」班 (改善点・要望)



図13 「嶺岡牧」班 (活用方策)

ミニシンポジウム (3月8日(土)13:00~16:00)

- ・趣旨及び講座概要の説明(普及課職員)
 - ・基調講演
 - 大下茂氏(帝京大学経済学部観光経営学科長)
 - ・ミニシンポジウム
 - コーディネーター/ネーター: 大下茂氏
 - パネラー: 平野金幸氏(ならしのコンシェルジュ研究会代表), 黒岩正和氏(四街道市産業振興課), 受講生代表(2名)
- 3か年にわたる講座の総まとめ的な位置づけとして、学識経験者、地域の担い手、受講生代表が総合討議を行う公開のシンポジウム形式とし、千葉県の産業遺産の活用について来場

者とともに考えることを目的として実施した。

大下茂氏による基調講演では、「活用方法を考えるためのポイント」として、産業遺産の定義を今一度問いなおし、そのうえで産業の進化形の方向、立場・視点、それぞれ違いによる活用方法を整理した。

平野金幸氏は、地域の産業遺産を活用した都市型観光を市民ガイドが中心となって進めている事例を紹介した。

黒岩正和氏は、四街道市の取組みとして産業遺産をはじめとする市内の様々な資源の観光及び商工の振興への活用を、市民中心で進める仕組みづくりの取組み及びその問題点を紹介した。

受講生代表 2 名からは、3 年講座を受講し、産業遺産の活用について考えたことについて述べていただき、その後の討議の材料とした。

討論では、各人が述べた内容をもとにして、産業遺産を活用することで期待される効果及び今後検討が必要な事項を題材とした。明確な結論を得たわけではなかったが、地域特有の技術（上総掘りなど）が水源確保だけでなく、天然ガス採掘などにも利用されたいことなどを総合的に検討し、各種イベント等に活用して地域振興に役立てることや、海水浴など千葉県の地域を支えた「産業」を検討し、活用可能な資源を掘り起こして行く必要があることなどが話し合われた。

3 3 年間にわたった講座の成果について

図 1 に示したような展開目標に立ち返り考えると、①千葉県産業遺産のストーリーモデルについては、講座の展開を修正しながら実施してきたことで、ある程度は達成したと考えられるが、②産業遺産活用実践体制の確立については、まだまだみな半ばといったところだと思われる。

②の目標では、活用に際して現代産業科学館が研究とストーリーづくりを行い、受講生を養成した「産業遺産活用サポーターズ」と「地域」の連携を進めていく、ということを示した。そのため、出席良好な受講生には修了証を発行したり、資料づくりやミニ展示づくり（図 14）の自主作業日を設けたり、受講生のやる気を引き出す方策を講じたが、「サポーターズ」のような組織を作るまでに

は至らなかった。もちろん、出席も良好で、自主作業にも協力的な方が数人はいたが、事務局側の力量不足が原因で組織になっていくような人材を養成するまで、話を持って行くことができなかったのである。県立の組織、ということを経験として、広域にストーリーを展開することを実践してきたが、地域に根差した組織のように強固な地盤を得ることができず、どうしても受講生がある程度団結して話を進めることができなかったことが目標に達せなかった主な原因と考えられる。



図 14 受講生有志が中心となり製作したミニ展示

ただ、そもそも手探りの状態で始めた講座であり、試行錯誤の途上でもあるので、今後も継続していくことで目標達成に近づくことは不可能ではないだろう。ただし、同じような構成で講座を展開すると、ストーリーの構築は進んでいくが、どうしても受講生に知識欲を充足することに重きが置かれることとなる恐れがある。そのため、今後は出来るだけワークショップ形式など、受講生が作業する機会だけでなく、ボランティアガイドなど地域の産業遺産活用の担い手の方々との交流する機会も増やしていくことが肝要である。

こうして、より広い視点をもつ参加者を増やしていくことができるだけでなく、館自身の経験を蓄積していくこともできる。同時に館として、産業遺産データベースの更新を進めて基礎的情報を充実させ、担当学芸員が遺産自体の研究を行っていくことで館全体の基礎的体力を向上させなければならない。先に述べた力量不足をカバーするとともに、特定の担当者によらない継続性を確保する必要があるからである。

4 おわりに

「講座 千葉県の産業遺産とその活用を考える」の講座開催も3年目が終了した。本稿では、本年度の実施結果をまとめるとともに3年間の成果を振り返り、今後当館が取り組んでいく方向性について考えてみた。

ミニシンポジウム時に話が出たように、検討すべきテーマやストーリーもまだまだあるだけでなく、受講生が活躍できるような力量をつけることができる講座を実施できるように、館自身の体力向上も図らなければならない。

このようにまだまだ発展途上であり、当初目標の達成には程遠いと言わざるを得ないが、講座の構成を改善しながら継続していくことで、目標に近づいていくことができると思われる。小笠原(2013)の繰り返しになってしまうが、このとき基礎的な資料蓄積及び技術史学的見地からの学術的検討をおろそかにしてしまっただけは本末転倒であり、産業遺産そのものの価値をきちんと評価してから活用に向かわなければならない。本館は、あくまでも「県立博物館」という組織の枠組みにあり、コンサルタントという立場ではないからである。

引用・参考文献

- 黒岩俊郎・玉置正美：「産業考古学入門」，東洋経済新聞社（1978）
- 加藤康子：「産業遺産 「地域と市民の歴史」への旅」，日本経済新聞社（1999）
- 矢作弘：「産業遺産とまちづくり」，学芸出版社（2004）
- 大下茂：「人の気を惹く地域づくりへの取組みの知恵・手法～地域の記憶を手掛かりに，地域経済文化おこしによる地域力を高める技をみがく～」，千葉県総合企画部政策推進室（2007）
- 日本大学生物資源科学部 ※糸永浩司・日暮晃一・藤沢直樹ほか：「鴨川ホリスティックツーリズムー鴨川市観光振興基本計画ー」，鴨川市（2007）
- 平井東幸・種田明・堤一郎：「産業遺産を歩こう」，東洋経済新報社（2009）
- 大下茂：「行ってみたい!と思わせる「集客まちづくり」の技術」，学陽書房（2011）
- 小笠原永隆：産業遺産の活用と現代産業科学館の役割につ

いて－特に産業観光の観点から－，「平成22年度千葉県立現代産業科学館研究報告」17（2011）

小笠原永隆：地域資源としての産業遺産の活用について－講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」の実施を通じて－，「平成23年度千葉県立現代産業科学館研究報告」18（2012）

小笠原永隆：産業遺産の活用に向けての一考察－講座「千葉県の産業遺産とその活用を考える」の実施を通じて－，「平成24年度千葉県立現代産業科学館研究報告」19（2013）